

お母ちゃんがかわいそうになった

僕の腹が減り出した時だった。十二時が過ぎているのは確かである。しかし、何時であるかは、正確には知らない。

僕は服を来て、ジャンパーを着て、めしを食べに、下の居間へ降りる。

そこで、僕はびっくりした。

太陽が薄い赤色をして、西の空で、沈みがけているのだ。

もう、今日の活動時間の三分の二は床の中で過ぎてしまったのである。

時、既に、四時五十分だ。それは、その時の時刻だった。

僕が「朝めし、食べる。」と言うと、母は笑った。

京太が相撲を見ている。

僕は、兄貴の夜食である。ほしぶどう入りのパンを半分へつり、それにバターをつけ、

母に紅茶を作ってもらい、「朝食」とする。

こんなに長い間、床の中で横になっていたのは、この数年、一度もなかった事である。